

現代イランにおける地方都市の変容

——「停滞型」都市ハマダーンの事例——

か の ひろ ま
加 納 弘 勝

はじめに

I 前近代イスラム都市としてのハマダーン

——歴史と形態——

II レザー・シャー期のハマダーン

III 最近のハマダーンとその変化

IV ハマダーン州の小都市マライエルとの比較

はじめに

イラン西南部のハマダーン州はイラン西北部アゼルバイジャン地方から連なるザグロス山脈の高原地域にあり、同州の西にはクルド人(350万)の住むクルデスタン州が広がっている。同州の州都ハマダーン市は、ザグロス山脈に位置するアルバンド山(海拔3580メートル)の山麓に位置し、海拔1890メートルの高原都市であり、人口は15万を数える。

ハマダーン市の歴史はきわめて古い。メディアナ王朝期(BC708~550年)には首都ヘクマターンの名で知られており、アケメネス朝期(BC559~330年)には、ダリウスI世(BC522~486年)などの夏宮殿の所在地として有名であった。今日でもハマダーンの5キロ先の一農村には、ダリウスI世とクセルクセスの活躍を称える石碑がなお残っている。アレキサンダー大王も東征の途中ハマダーンを征服した(BC330年)。また、中世においてハマダーン市は、シルクロード沿いの国際交易都市として重要な商業活動を営んでいた。

しかしながら、本稿でハマダーン市を取上げる

のは、こうした古代史や中世史への関心からでなく、ハマダーン市が最近のイラン都市発展において興味ある一つの型を提示しているためである。

イランでは、1960年代後半になって工業化や近代化への試みが実質的になされ、それにともなうて都市化もまた進行した。都市(人口5000人以上)居住人口は、1956年には632万人で総人口の31.0%を占めていたが、66年には979万人38.0%、76年には1572万人46.8%を占めるに至った。こうした急激な都市化は、ある種の型の都市でより強く進行した。それゆえこれとは逆に都市化がそれほど進行しない都市も認められらるのである(注1)。工業化・近代化はイラン都市に新たな役割を求めることになり、この目的に適合的な都市が急に発展してゆくことになった。

従来のイランの主要地方都市は、なによりもその地方で力を持つ有力者の本拠地であった。そして、主要都市間には広大な砂漠が広がり、キャラバンルート沿いに集落が点在するに限られた。こうして成立する地方経済圏の中心である主要地方都市に、中央権力は高官を派遣して行政に当たさせたが、それだけでは地方を十分に掌握できなかった。地方の独立性は強く残ることになったのである。

ところが、1970年代に入ってから、パーレビ前国王はイラン各地に大量の官僚を投入し、急増した石油収入をテコに、急速かつ多様な工業化を促

進していった^(注2)。この過程で、水、労働力、およびその他社会基盤の整った既存の主要地方都市は、規模が拡大し奥行が深くなっていくイラン経済を支える新たな担い手と期待され始めた。60年代の工業化のように首都テヘランだけがこれを担う時代は終焉したのであり、終焉すべきと判断された。このため主要地方都市は、それぞれ、地方経済の拠点であればよかった時代から新たな時代に突入したのである。主要地方都市はイラン経済全体の一翼を担う産業都市や、パーレビ国王の全国支配を保証する行政都市に変貌していったのである。

こうして、4大都市のイスファハン市（人口67万人）にはアーリアメール製鉄所（年産60万トン）、タブリーズ市（人口60万人）には機械やトラクター工場、マシュハッド市（人口67万人）には機械・電気製品製造工場、シーラーズ市（人口42万）には化学・ゴム工場が配置された。これにつぐ規模の都市にも、アバダーン市（人口30万人）にはすでに精油所が設置されており、この近くのホッラムシャー（人口15万人）には石油化学コンビナート、中央地域のアラーク（人口11万人）にはアルミ工場、テヘランから120キロ西のガズビン（人口14万人）にはエルブルズ工業団地が計画され、完成時には135の工場が稼動し、家族を含めて8万人がここに生活することになっていた。

新たな役割を与えられた地方都市は、急激な人口増加を示した。1956年にはハマダーンと同規模（10万人）の都市であったものが、76年には人口20～30万に膨張していった。ケルマンシャー、コム、アフワーズなどがこの例である。さらに、1956年にはハマダーン人口の半分程度の中小規模の都市でも、76年にはその多くが急速に発展して10万人の水準に達した。ホッラムシャー、ケル

マーン、ガズビン、アラーク、デズフルなどがこれに該当する。

急速な都市化という趨勢の中で、ハマダーンをはじめとする数都市は緩かな発展を示すにとどまり、どちらかといえば停滞的な都市となった。ハマダーン市の場合、その人口は1943年に10万4000であったにもかかわらず、1956年には9万9900人に減少し、その後1966年に12万4000人、1976年15万6000人という推移をたどった。30年間に50%強の増加であるとはいえ、その増加率は1956～66年、1966～76年の両時期とも他の主要地方都市より低い。ここにハマダーン市の都市発展のひとつの特徴がある^(注3)。

ハマダーン市を検討する第1の目的は、この停滞的な都市発展の原因を考察することである。古くからかなり大規模な人口を擁したハマダーンが、なぜ工業化・近代化の波に乗り遅れ、近年急速な拡大をみせた多くの都市と異なる変容を示しているのだろうか。その要因の検討は、同時に、急速な都市発展を引き起こしてきた要因を示唆してくれるだろう。

ハマダーン市を検討する第2の目的は、伝統的なイラン・イスラム都市を考察することである。停滞的都市であることによってハマダーンにはイラン・イスラム都市の古い構造と特徴を知る手がかりが、今日もなお多く残存している。しかもこの都市は19世紀には「外国商品の貯蔵庫」^(注4)と評されたほどであり、イスラム世界に典型的な国際交易都市の側面も十分に備えていた。そうした意味で、イラン・イスラム都市を考察する対象としてハマダーンはまことにふさわしい都市といえるだろう。

ハマダーン市を検討する第3の目的は、工業化・近代化が停滞型都市にいささかなりとも引き起し

た変容をあとづけることである。「停滞型」都市における変容であるからこそ、それは工業化・近代化の過程でイラン・イスラム都市に発生した最も原初的な形態の変容であると考えられるからである。いいかえるならば、ここに見られる変容は、イランの諸都市でより大規模かつ基層的に引き起された変容の原型なのである。それゆえその変容の検討を通じて、工業化・近代化の送り手である中央に対して、その受け手である地方における対応という、より一般的な枠組のもとに、この問題を考察する一つの手がかりをうることができると考えられる(注5)。

本稿では、最近の工業化・近代化にともなう(1)ハマダーン市における都市形態の変化、(2)イランイスラム都市の中心地域をなすバザール地域での諸変化を順次検討し、イラン・イスラム都市の構造と変容を分析することにしたい。

なお、本稿は英文で発表した“City Development and Occupational Change in Iran: A Case Study of Hamadan” (*The Developing Economies*, Vol. XVI, No. 3, Sept. 1978)をもとに、書き改めたものである。

(注1) 1956~76年の20年間、都市発展の遅い都市は、(イ)石油採掘・精製都市——アバダーンやカゼルン、(ロ)カスピ海沿岸の貿易都市——ラシュト、バンダレ・パーレビ、パーボル、(ハ)内陸都市——セムナン、ベヘバハン、バム、(ニ)少数民族の都市——チャハル・マハル、マハバード、イラーム、などがあげられる。これらの型については下記の拙稿を参照されたい。また、コストロも1956~66年の都市発展をもとに、都市分類を行なっている。

Kanō, H., “City Development and Occupational Change in Iran: A Case Study of Hamadan,” *The Developing Economies*, Vol. XVI, No. 3, Sept. 1978, pp. 298-328.

Costello, V., *Kashan: A City and Region in Iran*, London, Bowker, 1976.

(注2) 急速かつ多様な工業化の実態や急増した官僚については次を参照されたい。

拙稿「テヘランの発展と社会変化」(『アジア経済』第20巻第1号 1979年1月) 36~65ページ。

アジア経済研究所編『中東諸国の経済概況』1979年版「イランの項」(拙稿)。

(注3) 近世におけるハマダーン人口は次のとおり。1810年4万人、69年3万人、89年4万人、95年4万5000人、1910年7万人。

(注4) Barthold, W., *Historico-Geographical Survey of Iran*, Persian edition, Tehran, Ittihadie, 1930, p. 189.

(注5) バザールやモスク、その周辺の居住地からなる伝統的なイラン都市像を知ることが、イラン革命を経た今日とくに重要になってきている。なぜなら、伝統的都市やテヘランなどの大都市における、伝統的都市部分に住む人々には、国王による工業化・近代化は恩恵よりも被害ばかりを与えるものと思われたのである。彼らの持つ物質的・精神的な不満、いらだちが「西欧かぶれの近代化」を否定し、イラン革命を引き起こしたといえる。この部分の構造と仕組みへの理解を欠いて、イラン革命を検討することは、重要な環の一部を見落してしまうだろう。

このためには、テヘランとの対応でみればせいぜい「準近代的な地域」しか見あたらない地方都市における最近の変化を検討することが、国王の工業化・近代化政策のより深層的な部分への影響を知る手掛りとなる。今後イラン革命を経て、イラン諸都市の発展にはいかなる変化が生じてくるのかは興味深い問題である。

なお、イラン革命と都市との関連については拙稿で一部あつかっている。ご参照願えればありがたい。

拙稿「イラン革命を担った底辺の構造」(『エコノミスト』1979年3月6日号) 36~40ページ。同「イラン革命と分析枠組」(『中東通報』1979年9月号) 25~36ページ。同「ホメイニ体制は存続できるか——革命下さまたまに生きる民衆——」(『エコノミスト』1979年12月4日号) 18~25ページ。

I 前近代イスラム都市としての ハマダーン

—— 歴史と形態 ——

1. 今日のハマダーン市の特徴

ハマダーン州にはハマダーンの他に、マライエ

ル（人口4万7000人）、ナハバンド（人口2万9000人）、トーセルカン（人口1万8000人）などの主要都市が存在する。同州都市人口は31万人で州人口109万人の28.5%となっており、このうちハマダーン市の人口は州人口の14.3%を占め、州都市人口の約半分にあたる。州内第1位の都市人口と第2位の都市人口とを比較すると、1966年に4.8倍、76年には3.2倍と格差が縮小しており、第2位都市マライエルの増加が目立つ。州人口に対する州内都市人口の比率や州内都市人口に対する州内1位都市の占める比率をみると、ハマダーン州はギラン州、東・西アゼルバイジャン州、クルデスタン州と類似している^(注1)。以上の二点から、ハマダーンはイラン西北高原の典型的な都市といえる。

さて、ハマダーン市の経済的特徴として、近代的な大規模工場を欠くこと、逆に、伝統的手工業者の多いことがあげられる。同市には1万1000の事業所があり、ここに1万7300人が就業している。一事業所当たり1.6人が働いており、この数値は全国平均値に比較して低い^(注2)。同州事業所数は全国事業所数の2.5%を占めるのに対して、その労働人口数は全国の1.5%にすぎず、ハマダーン事業所の小規模さを示す。なかでも、民間および政府による近代的大工場はハマダーンには欠けている^(注3)。

ハマダーン市に存在する1万1000事業所のうち25.2%（2770事業所）が工業である。この比率はイスファハンの34.6%、ヤズドの34.8%について高い^(注4)。この最大の理由は、イスファハンと同じように織物関係の事業所が多いからである。ハマダーンでは織物関係の事業所は1566カ所で、工業事業所の56.5%と半分を越え、なかでもカーペット生産の事業所は1171カ所で織物関係事業所の75%、また、全事業所の10.6%を占める。労働人口

1万7300人のうち、カーペット生産に従事する人口は2670人で全体の15.5%である。これは、一事業所当たり従業員人口2.28人で、ハマダーン市の全事業所の規模1.6人を越えている。したがって、ハマダーン市の主要な工業はカーペット生産であるといえよう。

ハマダーン州においてもカーペット生産は重要である。同州の織物関係事業所は5万4677カ所あり、このうち、5万4437カ所がカーペット生産を営んでいる^(注5)。ハマダーン州のカーペット生産の事業所は全国的にみても中央州、イスファハン州について3位を占め、住民1000人当たり事業所は42カ所とイラン最高である。

ハマダーン州の主要農産物は小麦、大麦、果実、家畜飼料であり、このほかに羊の飼畜が重要である。イラン西北部の高原ではこれと同じ傾向が認められる。「羊毛は数世紀にわたってこの地域の重要な資源」^(注6)であった。この羊毛を利用して農村部でも都市部でもカーペット生産がなされてきたのである。羊毛は農村部や山岳地帯からハマダーン・バザールに持込まれ、ここで糸に変えられた。周辺の農民や都市住民がこの糸を購入したり商人が供給して、カーペットを生産した。一般には、かれらが自ら羊毛を糸にすることは少なかった。こうしてカーペット工業は営まれてきた。このほかにも、靴縫い、ゲリーム（小布）織物、陶器製造や皮なめしなど小規模な伝統的工業がハマダーン市で営まれている。以上の点から、ハマダーン市の経済はカーペット生産を中心に多くの伝統的工業から成りたっており、近代工業を欠く都市といってよいだろう。

2. 近代以前に繁栄したハマダーン

メディナ時代、アケメネス朝期のハマダーンは、現在のバザール地区に隣接する小高い丘、ヘクマ

タンにあった。ここがハマダーンの都市核である。この時期にハマダーンは数ファルサアフェ（1ファルサアフェは約6キロメートル）平方四方あり、ここを征服するには市内に引込まれている用水路を破壊しない限り無理だといわれた^(注7)。644年には、ナハバンド（ハマダーンの南80キロメートル）の戦いでアラブ軍に敗れたサーサン朝の將軍がハマダーンに逃げ込んだ。しかし、同年アラブ人が同市を支配下に入れ、イスラム時代のハマダーンが開始された。10世紀には旅行家イブン・アル・ファキフ（Ibn al-Fakih）も「ハマダーンは重要な都市」^(注8)と言っており、イスタフリーもハマダーンは大都市であり、その広さは1ファルサアフェ四方^(注9)と述べている。ハマダーンは内都市と外都市にわかれ、内都市には四つの鉄門が備っていたし、住民は庭と多くの果樹園を持っていたと伝えられる。ハマダーンには市壁があり、市壁内部の畑は部分的に人工の灌漑設備を備え、天水にだけ依存したのでなかった。ハマダーンでは羊が多く、羊乳でチーズを産し、バザールではサフランが販売されていた。経済活動の点でも重要な都市であった。

しかしながら、「繁栄する中世のハマダーン」^(注10)も1221年にチンギスハーンが侵入すると崩壊した。さらに1380年に、チムールがイラン諸都市を劫掠したが、ハマダーンもこれをまぬがれなかった。それ以後サファビー朝期（1501～1735年）までは、おもに地方豪族がここを統治していた。サファビー朝期には、オスマン帝国との継争の地になった。1587年に権力の座についたアッバスⅠ世（1587～1629年）は、軍事要塞としてハマダーンを重視した。ハマダーンに砦を築き、ここに軍隊を配備したのである^(注11)。その結果、ハマダーンは、多くのイスラム都市にみられるような、市壁

内部にかなりの耕地をもち、日干しレンガの家々がならぶ、往時の姿に再びもどったといわれる。市内を一本の大道が貫き、これに沿って、よく整った店がならんでいた。

しかし、1722年以降アフガン人が東部イラン地域に侵入しはじめると、サファビー朝はその対策に手を焼き、そのため西部イラン地域は手薄となった。このため、1723年にはオスマン帝国のバグダッド守護隊長がハマダーンを占領した。

カージャール朝期（1795～1924年）にモハammad・カージャールがハマダーンを奪回した。これ以降今日にいたるまで同市はイランの地としてとどまっている。彼もまた軍事要塞としての同市の重要性を認めており、トルコ系部族ガラ・ゴズル（Gara Gouzlu, 後述）を含めた兵を宿営させて、西部イラン地域の防衛に努めた。カージャール朝政府は一方でオスマン・トルコ帝国、他方でイラン中央部に勢力を持つロール族やバフティアリ族に対抗するために、西部イラン地域を重視していた。その現われが1807年と8年のドウラトバード（現マライエル）およびスルタナバード（現アラーク）の建設であった。つまり、小モスクとバザール、ハンマームと役所を建設し、これらを「村から町に」^(注12)格上げした。ハマダーンへの軍人配備やこの二要塞都市の建設が、カージャール初期における、西部イラン地域への多大な配慮を感じさせる。とはいえ、この時期のハマダーンはかつての規模に比較すれば、「荒廃した瓦礫」^(注13)にすぎず「中世のハマダーン」の面影は全くなかったのである。

しかしながら、19世紀後半にイギリス・インドとイランとの貿易がふえてくると、ハマダーン市は再び活況をおび始めた。カーゾン卿^(注14)が1889年同市を訪れた時には人口は2万人にすぎなかったが、4～5年後に訪問した旅行家トーマンス

キーは人口4～5万人と記している。この数字自体に疑問もあるとはいえ、貿易量の増大でハマダーン人口がふえたのも事実である。19世紀後半以降、外国商品の流入は急増し、バグダッドあるいはモスルから、イラン領内のカスレ・シリーンを経て、ケルマンシャーやハマダーンに商品が流入し、その後テヘランへと輸送されていた。1889年にはこのルートで流入した商品は、イラン総輸入額の10%にあたる39万4000ポンドにのぼった。中世ハマダーンに備っていた国際交易都市としての機能が復興したのである。事実「ここ20年間(1880～1900年、筆者注)に、この町はバグダッドとの貿易で発展した」^(注15)といわれていた。イギリスにとって、中東の拠点バグダッドと植民地の拠点、インドの中間に位置するイランは重要であり、このためにまたハマダーンも重要な地域であった。1863年、イラン電信線が同市を通過してテヘランにのび、この電信線がイギリス・バグダッドとインドを強く結びつけることになった。

1910年代に入ると、オスマン・トルコ帝国・ドイツ両国と、イギリス・ロシア両国の勢力が西部イラン地域で対決し、緊張を高めていた。第一次世界大戦後の混乱の中でレザー・シャーは1925年にパーレビ王朝を新興する。この4年前にかれはクーデターによってイラン政治の実権を握っていた。クーデターの際には、レザー・シャーはイラン西南部でイギリス軍人顧問と接触した後で、ハマダーンとガスビンから3000人の兵力を動員し首都に進撃したのである。この事件はハマダーン周辺はイギリスが力を持ち、またかれらにとって重要な地域であったことを示している。

3. ハマダーンを構成する四つの地域

レザー・シャーは政権を掌握した後、イランの工業化・近代化を試み、都市にも大きな変化をも

たらすことになった。ここではそうした都市変化を記述するに先立って、伝統的なイラン・イスラム都市の形態に注目しながら、都市ハマダーンの外観を記述しておこう。

伝統的なイラン・イスラム都市は形態学的に四つの地域に分かれる^(注16)。

(イ) 王城、アラク、あるいはコハンデージュ。王城を取囲む壁や時には壕も備わり、閲覧広場もある。これら王城地域をシャーレスタンともいう。

(ロ) バザール地区とその中に配置されている主モスク(マスジェド・ジョメ)。シャーレスタンの外に形成された地域でラバズともいわれる。バザール地区の中心には二本の道が直角に交ったチャハル・スー(十字路)があり、時には最も古くて、かつ栄えるバザールをカイサル・バザールという。

(ハ) 居住区、マハッレ。同一部族、同一種族、同一宗派の集団やさらにはこれと絡みあって形成される同一職業の集団が、それぞれ独自の居住区を形成している。古くは、都市行政の点からすれば独自の行政組織をもつ半独立的な、都市内都市とさえいわれた。おのおののマハッレは小バザール、モスク、ハンマームなど基本的ファシリティを備えていた。住民は相互に競争意識をもやし、争いは恒常的であり、往来はなく、結婚も禁じられていた^(注17)。

(ニ) 市壁と門。ムスリム都市は市周辺を市壁が囲み壕がその外にめぐらされていた。市壁の高さは、テヘランの場合、10メートルである。市壁には通常4～8の門があつて、日の出とともに開門され落日とともに閉門された。大都市の場合、市壁の外に小規模なバザールがあるのが普通で、閉門に遅れた旅行者はここで夜を明すことになった。

19世紀末におけるハマダーン市の地図^(注18)によれば、上述した四つの都市構成要素は次のとおりである。ハマダーン市は南が高く北が低い斜面にある、市の北東地区にはエクパタン（ヘクマタン、メディナ朝期の首都名）の丘（縦1キロメートル、横0.5キロメートル）がある。この丘の東側には南部からバズジェルド川が流れ込んでいる。住民たちは今日でもここで洗濯をしているが、水量は多くない。それでも川床は3～4メートルの幅をもっている。

ここから南の高台へ1.5キロメートル離れたところに古城地域（ガルエ・コホネ）がある。ここにも南の高台から別の小川が引き込まれており、一種の壕になっている。イスラム都市では古くから都市給水の配慮が不可欠とされ、壕の創設と同時に王城内に給水施設がくみ込まれているのがふつうである。

さて、(イ)王城地域をこの古城地域と考えると、市の中心にある(ロ)バザール地区・主モスクと(イ)王城地域は全く放れてしまい、イランの一般的な都市プランと異なってくる。ところが、この古城地域をアッバスⅠ世が築いた砦^(注19)と考えるか、あるいは、カージャール朝初期にモリエールがハマダーンを訪問し宿泊して確認している軍宿营地^(注20)とみなせば、本来の(イ)王城地域はヘクマタンにあったと考えてよい。すると、(イ)王城地域と(ロ)バザール地域とは接近し、イランの一般的な都市プランと異和感はなくなる。実際にも、古くはヘクマタン地区がシャーレスタンと呼ばれており、この地区内に「城の前（サレ・ガルエ）地区」とか、「城の後（ポシュト・ガルエ）地区」の名のマハッレが存在している^(注21)。この事実が先の解釈を裏づけてくれる。

(ロ)バザール地区と主モスク。(イ)王城地域の南に

接した地域。19世紀中頃にはいくつかのドームを連ねた屋根で被われたバザールが3列あり、500以上の店、50のキャラバンサライ（隊商宿）、60のハンマーム（風呂）が存在した^(注22)。主モスクはバザール内、つまりヘクマタンの丘から逕東に位置した。これはファトフ・アリ・シャー（1797～1835年）の時代に、テヘランのマスジェド・シャーの建築方法をまねて改築されたものである^(注23)。主モスクはすでに11世紀にはここに建設されていた^(注24)。バザール内の一角のやや広い地域に、青物広場（サブゼ・メイダン）が配置されていた。

(ニ)市壁は14世紀には全長9キロメートル（3000スペイン）あったとされている。19世紀末の地図によれば、市壁は東のモサッラー（嘆願所）と呼ばれる小高い「自然の要塞」から、古城地域を経て市の西側に達し、これより詩人パーバ・ターヘル^(注25)の墓（1019年死亡）を経て北に向う。そして、北端で東に折れ、市の最も低くなるあたりに、バズジェルド川の流出口を作り、ハバール通りを経てモサッラーに回帰している。この市壁で囲まれた地域は、現在のハマダーン市の大半を占めている。

(ハ)居住区、マハッレ。19世紀末に同市は4つの居住区に分かれており、それぞれに差配がいて政府に対して徴税、治安の点で責任を負った^(注25)。この職は世襲されていた。居住区の名は詳びらかではない。ただ、少なくともユダヤ人、アルメニア人の少数宗派住民が集中する地区は存在したとみなせよう。

居住区を形成する主要グループには、(1)統治者およびその一族、有力者、(2)アルメニア人(3)ユダヤ人などがあつた。

統治者やその一族、有力者は19世紀後半にはバルジェルド川とその支流が形成する両河地域（ペイン・アル・アハレーン）とその西側に住んでいた

(注26)。19世紀前半のハマダーン市の統治者は、チムール時代に周辺地域から移住してきた、トルコ族に属するガラ・ゴズルの族長であった。彼は私兵騎馬兵を有しており、テヘランの中央政権からも、中央から派遣されたケルマンシャーの知事からも一目置かれていた(注27)。彼の一族は、「町の軍事組織」(注28)をなしていた。

アルメニア人は少数宗派、少数民族である。18～19世紀には約100家族が住み、ペルシャ風の衣服を着、ペルシャ語を話した(注29)。テヘランのアルメニア人が民族衣裳を着て、アルメニア語を話していたのに比較すれば、ハマダーンのアルメニア人はペルシャ人により同化していたといえよう。1000家族のうち300家族はヘクマタンの丘に集中していた。ここには、アルメニア人地区、教会地区、ナザレ小バザール地区などのマハッレがあり、この名前こそ居住区に住む少数宗派の存在を示すものである。また、現在のシャープール大通りに近い地域に、グレゴリア派キリスト教会と学校(1880年開校)があり、その奥の地域にはプロテスタント教会がある。このようにアルメニア人はキリスト教徒である。ハマダーンにおけるアルメニア人居住の由来は、アッバスⅠ世によって(注30)、1601年に現在のソ連領から強制移住させられたことにある。以来、かれらは商業に従事してきた。この強制移住は、イスファハンのジョルファ地区のアルメニア人がたどった道と同じである。また、1910年代にはソ連の社会主義革命を嫌ってアルメニア人が流入してきた。

キリスト教徒としては、他にアッシリア系住民がいる。かれらはプロテスタントとカトリックに分かれ、それぞれ教会を持っている。プロテスタント教会は新興の南部高台地域にあり、旧州庁の建物がある場所の裏側に位置する。カトリック教

会は、ブアリ通りのそばで、中央広場に近いクラン地区に位置している。

このように、ハマダーンのキリスト教徒は各セクトごとに四つの教会を持って生活している。

西欧諸国からのキリスト教伝導団もハマダーンに流入してきた(注31)。南の高台、アッシリア系住民のプロテスタント教会の近くに、外国人地区(クーチェ・ファランギー)を形成していた。ここには第1次世界大戦後に建設されたアメリカ病院がある。

ユダヤ人も、ハマダーンの発展には大きな貢献をなしてきた。19世紀末にユダヤ人人口は5000人といわれ(注32)、ユダヤ人旅行家の記録では200家族となっている。200家族は庭(バーゲ)付きの家を持つ大商人、医者、金細工工であった(注33)。もちろん、ここのユダヤ人も楽土、踊子、産婆、酒製造業というあまり評価の不高くない職業にも従事していた(注34)。ハマダーン市におけるユダヤ人の聖地は主モスクのすぐ南にあり、ここはエステルとモルダッハ(クセルクセスの妻と叔父とともにユダヤ人)の墓であると信じられている。しかし、実際はサーサン朝期のヤズドガルド(399～420年)というユダヤ人の女王の墓である。この聖地から西に広がる地域はユダヤ人の居住区となっており、その居住区の一部は「ユダヤ人のハンマーム通り」地区とか「ユダヤ人の屠殺場小道」地区などと名付けられている(注35)。バザール地区の西端にある「ユダヤ人バザール」へ行くには、ハンマーム通りを通ってゆく。ユダヤ人たちはシナゴーグを4カ所、彼ら専用のハンマームを2カ所、それに墓地も持っていた。ユダヤ人墓地はこの地区の西端、現在のセパーボザーヘデ通りにあって1953年までは存在していた。また、1900年にはユダヤ人学校も同地区内アリアンス通りに作られ、

ここにはムスリムの子供も若干通っていた。

ハマダーンにおけるユダヤ人来住の由来は、ダリウス1世(BC522~486年)の時代に、バビロンの捕囚後の強制移住によっている。これもイスファハンのユダヤ人の由来と同じである。しかし、19世紀末にハマダーンの商業活動が復活すると、バグダッドからユダヤ人多数が来住したらしい。このことを証明することとして、ハマダーンには古くから住むユダヤ人とバグダッドからのユダヤ人の2種のユダヤ人があり、「優勢なのはバグダッドのユダヤ人」(注36)といわれた事実があげられる。しかしながら、ユダヤ人の繁栄、なかでもバグダッドのユダヤ人の繁栄は、ムスリム住民の反発を買い、たびたびシナゴグは閉鎖させられた。17世紀には、アッバスII世(1642~67年)はユダヤ人にイスラムへの転向を強要した。ユダヤ人は1トマンを支払って転向するか、ハマダーンから逃げざるをえなかった。多くのユダヤ人がクルデスタンやバグダッドへ逃げたという。1900年にもユダヤ人の住区を奪う宣言が出され、モスレムの仕立屋は、ユダヤ人の服を縫ってはならないとされた。

なお、第2次世界大戦前後には、ハマダーンのユダヤ人8000名のうち1500名はテヘランに移住した。そして、その後も多数が移住した結果、現在では3000人が住んでいるといわれる。

このほかに、少数民族でかつスンニ派のクルド人も周辺の農村に散らばっている。彼らもまた、ハマダーンのボルジェ・ゴルバン廟(14世紀に作られた)を聖地として訪問した。

ハマダーンは、少数民族・少数宗派の住民がそれぞれ集住する居住区(マハッレ)からモザイク状に成り立っていた。さらに、各民族や宗派が独自の商業機関を持っており、なかでも独自の宗教

機関を備えていた。単にハマダーン住民がこれを利用するだけでなく、周辺の農民や小都市の住民がそれぞれの宗派の機関を利用するためにハマダーンにやってきたのであった。

(注1) Kanō, *op. cit.*, pp. 301-302.

(注2) Iran, Plan and Budget Organization, Statistical Center of Iran, *Sarshomali-e omūmi-e nafās va maskan* [National Census of Population and Houses], 1976.

(注3) 民間企業の製造業における投資活動を援助するイラン鉱工業銀行(Industrial and Mining Development Bank of Iran, IMDBI)の融資額をみると次のようになる。1959年から77年末までの融資額累計はテヘラン市が364億7700万リアルで、累計合計の22.5%を占め、テヘラン市を除いた中央州には351億4700万リアルで全体の21.5%を占めている。テヘラン周辺に約半分が融資されていた。これに対してハマダーン州には5億2800万リアルで、全体のわずか0.3%にすぎない。住民1人当たりの融資額をみると、テヘラン市8106リアル、テヘラン以外の中央州3万9330リアル、ハマダーン州408リアルとなり、ハマダーン州への融資の小ささがわかる。中央州に近代的工場が集中的に設立されてきたことも判明する。

IMDBI, *Eighteenth Annual Report, 1977/78*, Tehran, pp. 38-39.

(注4) Iran P. B. O., Statistical Center of Iran, *Natāej-e maghrūmati-e sarshomali az kārgahā 2532-2533* [Results of Workshop Census of 1973-74], 1976.

(注5) Iran, P. B. O., Statistical Center of Iran, *Natāej-e āmalgiri-e sanaet-ye nasājī-ye rōstāi* [Weaving Industries of Iranian Villages], 1351 (1975).

(注6) Bemont, F., *Les villes de l'Iran*, Vol. 2, Paris, Les Presses de l'Imprimerie Louis-Jean, 1973, p. 197.

(注7) Schwarz, P., *Iran im Mittelalter nach den Arabischen geographern*, Hildesheim, George Olms Verlag, 1969, p. 519.

伝説によれば、ダリウスI世の時代に、アケメネス朝の宝石埋蔵地としてハマダーンが選ばれた。300の部屋をもつ城が建設され、その周辺に八つの門が作ら

れ、二つの12エル（7～10メートル）の高さの側廊が作られた。この地区（Sartik）には国王と高貴な女たちが住み、城の近くには將軍たちの家族、縁者、神宮が築められたし、市の安全を確保するため1万2000人の兵が配備されていた。

（注8）Ibid.

（注9）Ibid.

（注10）Ibid.

（注11）Bemont, *op. cit.*, p. 194.

（注12）Momeni, M., *Malayer und sein Umland*, Marburg, Geographischen Institute der Universität Marburg, 1976, pp. 29-30.

（注13）Morier, J., *A Second Journey through Persia, Armenia and Asia Minor*, London, 1818, p. 264.

（注14）Curzon, G. N., *Persia and Persian Question*, Vol. 2, London, Frank Cass & Co., 1966, pp. 563-577.

（注15）Barthold, W., *Historico-Geographical Survey of Iran*, Persian edition, Tehran, Ittihadie, 1930, p. 190.

（注16）Afmad Asraf, “Vizeghihā-e tārikh-e shahrneshini dar Irān” [Historical Specificity of Iranian Cities in Islamic Era], *Nome-ye ālām-e ejutemāi*, Vol. 1, No. 4 (1974).

またこうした具体的なイスラム都市像として次を参照されたい。拙稿「イスラムの生産者都市ブハラ」（林武編『発展途上国の都市化』アジア経済研究所1977年）。

（注17）サファビー朝下のイスファハーンには38のマハッレがザーヤンデ川の北側にあり、南側にはジョルファなど五つの大きなマハッレがあった。マシュハッドには32のマハッレがあり、各々に1人あるいは数個に1人のキャドホダー（差配）がいた。

また、ザンド朝下のシーラーズには13の大マハッレがあり、ユダヤ人のマハッレ、アルメニア人のマハッレなどと分かれていた。

（注18）Jackson, A., *Persia, Past and Present* (1906), reprint ed., New York, AMS Press, 1975, p. 146.

（注19）Bemont, *op. cit.*, p. 194.

（注20）Morier, *op. cit.*, p. 264.

（注21）Strange, G., *The Lands of the Eastern*

Caliphate (1905), reprint ed., London, Frank Cass & Co., 1968, p. 194.

（注22）Jackson, *op. cit.*, pp. 147-148.

（注23）Mohammad Taghi Mostafavi, *Hekumatan, āsar-e tārikh-e hamadan* [Hekumatan Hill, Historical Traces of Hamadan], 1964, p. 214.

（注24）Schwarz, *op. cit.*, p. 518.

（注25）Jackson, *op. cit.*, p. 147.

（注26）現地でのインタビューによる。

（注27）Kinneir, J., *A Geographical Memoir of the Persian Empire* (1813), reprint ed., New York, Arno Press, 1973, p. 127.

また、ガラゴズロ家は今日でもイランエリートを形成する10家族の一つである。これについては、以下を参照。

Bill, J. A., “The Patterns of Elite Politics in Iran,” in *Political Elite in the Middle East*, ed. G. Lenczowski, Washington, American Enterprise Institute for Public Policy Research, 1975, p. 33.

（注28）Bemont, *op. cit.*, p. 196.

（注29）Wills, C., *In the Land of Lion and Sun, or Modern Persia*, Glasgow, The Grand Colossus Warehouse Co., 1891, p. 148.

（注30）Bemont, *op. cit.*, p. 195.

（注31）Elder, H., *History of the American Presbyterian Mission to Iran, 1834-1960*, Tehran, Commission to the Church Council of Iran, n. d. p. 79.

（注32）Field, H., *Contributions to the Anthropology of Iran* (1939) reprint ed., New York, Kraus Reprint Co., 1968, p. 307.

（注33）Habib Loi, *Tārikh-e yahūd-e irān* [History of Iranian Jews]. Vol. 3, Tehran, Beruhkīm, 1968. p. 561.

（注34）ハビブによれば1903年ハマダーン市から30キロ、クルデスタン地域に入ったケルマンシャーでのユダヤ人の職業は次のとおりであった。

アッタール（香料商人）22名、大商人タージェル55名、金細工23名、布売（店なし）44名、アッタール（店なし）70名、染色屋28名、運搬15名、ブローカー（ボンガー）5名、ヘブライ語教師2名、織物業10名、酒作り（アラーク）2名、酒売り（アラーク）3名、床屋3名、(Ibid., Vol. 3, pp. 813-814)

また、シーラーズ市（1903年）のユダヤ人の職業は次のとおりである。

行商人400名、建設業（パンナー）200名、金細工102名、ワイン販売80名、酒（フラク）作り10名、大商人20名、肉屋15名、小間物（ハッラージ）5名、両替商10名、宝石商5名、薬士踊り子60名、医者5名、外科医2名。

また、1910年～1942年におけるユダヤ人の数は次のとおり。なお、1940年代に多くのユダヤ人がテヘランに移動した。

都 市	ユダヤ人数	シナゴーク数	ハンマーム数
イスファハン	12,500	29	3
河 畔 辺	200	1	1
ホッラマバード	300	1	—
マライユル	350	1	1
アラーク	300	1	1
ヤズド（1922）	2,000	11	2
ヤズド（1942）	4,000	—	—
ハマダーン	8,000	4	2
ザンジャン	30家族	1	—
ナハバンド	600	1	1
トーセルカン	350	1	1
ブシユル	400	—	—
ラシユト	300	1	—
シーラーズ	17,000	12	—

（出所）Ibid., pp. 999-1010.

（注35）Mohammad Taghi Mostafavi, *op. cit.*, 巻末地図。

（注36）Barthold, *op. cit.*, p. 190.

II レザー・シャー期のハマダーン

1925年パーレピ王朝を創設したレザー・シャーは、イランの工業化・近代化を促進した。このレザー・シャーが王位にあった時代、すなわち1925～41年をイラン近代史における第一次近代化の時期とみなせよう^{（注1）}。

彼は西部イランのケルマンシャーおよびハマダーンを地方行政の中心地として重視しただけでなく、商業の中心地としても重視した。ハマダーンはイギリスおよびインドの商品のイランへの流入拠点として放置されるべきではなく、当時の主要輸出品であった乾爆果実、綿花の集散地となるべきであると彼は考えていた。しかし、レザー・シ

ャーのこうした構想にもかかわらず、1922年当時には多量交通にたえられる道路は、第1次大戦中にロシアとイギリスによって建設されたハマダーン・ガズビン道路しかなかった。レザー・シャーの改革計画に応えるためには国内道路の拡充が不可欠であった。アメリカ人経済顧問シュージュタルも、バグダッドよりハマダーンを経てテヘランに通じる道路を重視した^{（注2）}。また、同じくアメリカ人経済顧問ミルスポーは鉄道建設のための諮問案の中で、ハマダーン経由の鉄道を重視した^{（注3）}。つまり、8本の鉄道計画のうち4本がハマダーンを通過するよう諮問したのである。こうした計画から読みとれるように、西部イラン、とくにハマダーンにとって脚光を浴びる1920～30年代を迎えることになった。

レザー・シャーはイラン国軍の改革と統一とその完全な掌握に腐心した。一方1922年にはシャイフ・アズハルの半自治国を攻撃し、さらに25年にはクルド族の反乱を制圧し、第1次大戦後「イラン国内に全く欠けた治安」^{（注4）}を回復した。とはいえ、一連の部族反乱の中でロル族の征服が最も遅れ、31年にはロレスタンで深刻な反乱が発生したため、32年には政府はロル族対策に焦点を移さざるをえなかった。

国内の和平化を進めて国内建設を開始したレザー・シャーは、軍隊の強化とともに都市の発展にも関心を示した。こうしてイラン各都市に新たな都市計画が導入されることになった。1933年の法令が示すように、主要道路の幅員拡張と新規建設が行なわれ、このために必要な土地の安価な買収が可能とされた^{（注5）}。

国内和平化を促進するものとして、各都市の市壁は一律的に除かれ、その跡地は大通りとなった。

こうして、イランの都市は市壁を越えて発展が始まった(注6)。

脚光を浴びた1920～30年代には、他都市と同様にハマダーン市にも都市計画が導入された。ドイツ人技師によって6本の道路が放射線状に広がる都市計画が考案され、31年にこれが採用された。こうして現在のハマダーン市が出現することとなった。パザールの少し南に中央広場(メイダン・パハラビー)が形成され、6本の大通りのうち2本がパザール地域を突き切って走り、パザールを分離してしまった。なお、6本の大通りには遠隔地交通路が接続されていた。この時期には、また、多くの建物が建設され、それらは現在でも全建物の14.3%をしめている。当時開発された地区は、旧行政区の1区、隣の2区、アルメニア人の多い3区および、3区の外側に位置する9区であった(注7)(第1図参照)。

1920～30年代におけるレザー・シャーの施策が、ハマダーン市に多くの脚光を集めたのは事実であった。けれども、レザー・シャーが国内和平化に成功すればするほど、ハマダーン市の発展の基礎は奪われることになった。なぜなら、クルド族、アラブ族、そして最後にロル族やその一部バフティアリ族による部族反乱を抑えたレザー・シャーは、イラン全土に駅制を確立することに成功した。そして、長い間イギリスが求めてきた、イラン中央部、つまりロル族やバフティアリ族の居住地を通る、ペルシャ湾ーテヘラン間の最短ルートの使用が可能となった。1931年にはイラン中央道路が完成した。38年には採算に乗らないもののイラン縦貫鉄道も完成した。こうした最短ルートの完成で、西部イランにおける国際交易都市ハマダーンの価値は低下した。つまりバグダッドーハマダーンーガスビンーテヘランというルートは、イラン

経済にとって重要なものではなくなってしまったのである。

すでに述べたように、ハマダーンの工業の中心はカーペット生産を中心とする小規模工業である。20世紀初頭にはハマダーンの皮革業・カーペット生産は有名であった。1909～12年にはハマダーンには(注8)、マシュハッドと並んで労働者40～50人を雇う八つのモロッコ皮工場が存在し、5～10人の労働者を雇う多くの「田舎工場」が存在した。あるいは、皮革業を営む200ほどの工場があつて1350人が働いていたともいう(注9)。また、カーペット生産ではテヘランのジャハク社(注10)が支社をここに置き、カーペット糸を農民に配給し製品を買取っていた。しかしながら、皮革・カーペット以外の新しい産業はハマダーン市には現われなかった。皮革・カーペット産業にしても、レザー・シャーによる近代国営工場は導入されなかった。経済の面でも社会対策の面でも、ハマダーンは、国家による投資対象としては認められなかったからである。事情は民間企業家の場合にも同じであった。こうしてハマダーンは周辺の農村人口を吸収する力を欠き、逆に多くの住民がテヘランに流出していった。

(注1) 拙稿「イランの近代化と社会変動」『国際問題』1979年5月号)14～27ページ。

(注2) Shuster, W., *The Strangling of Persia* (1912) reprint ed., New York, Greenwood Press, 1968, p. 307.

(注3) Millsbaugh, A., *The American Task in Persia* (1925) ed., New York, Arno Press, 1973, p. 269.

(注4) Banami, A., *The Modernization of Iran*, Stanford, Calif., Stanford Univ. Press, 1961, p. 128.

(注5) Ali, N., *Historical Evolution of Municipal Government in Iran*, Ann Arbor, Mich., University Microfilms, 1961, pp. 101-103.

(注6) Scharlau, K., "Moderne Umgestaltungen in Grundriss iranischer Städte" *Erdkunde*, No. 15 (1961),

(注7) Iran, Ministry of Housing and Urban Development, *Tarkh-e jam-e shahr-e hamadan* [Master Plan of Hamadan city], 1970.

(注8) Abudllaev, Z., "Formation of Modern Labour Class in Iran in the Early 20th Century," in *The Economic History of Iran, 1800-1914*, ed. C. Issawi, Chicago, University of Chicago Press, 1971. pp. 297-298.

(注9) Rabizade, M., *Razvitie kapitalisticheskogo predprinimatestva b promyshlennosti Irana v 30-kh godakh XX veka* [Progresses of capitalistic manufacture in Iran in the 1930s], Baku, Izdatelstvo ELM, 1970, pp. 18-19.

(注10) Eugène, A., *La Perse d'aujourd'hui*, Paris, 1908, pp. 42-43.

同書は「豊かなロシア人が2000の男や子供を雇用し、200台の織機を動かしていた」という。これが多分ジャハタ社であろう。

III 最近のハマダーンとその変化

1960年ハマダーン州が独立した州となり、ハマダーン市がその州都となると、行政都市としての機能が拡充されてきた。1950年代(1953)と70年代(1973)とを比較してみると(注1)、役所数は若干ふえたにとどまった。しかし、銀行は5行から59行と急増し、商工会議所や関連事務所は6カ所となった。学校も46校から84校となり、このうち2校は成人学級であって文盲退治を試みている。医院も20軒から82軒(うち歯科31)となった。これは人口1000人に対して医院は0.53で、20年前の0.20の2倍以上になっている。このほかに図書館4カ所、各種の療、スタジアム(2カ所)、映画館4カ所、保健所8カ所が建設された。古くから存続する施設をみると、マスジェドは57、イマームザーデ(聖者廟)は6、ハンマーム(風呂)は男女

共用39、女性専用12、男性専用17カ所となっている。かつては、周辺農民がハマダーン市に備わる宗教的機関を利用するためにここを訪問した。今日では彼らは医療、教育など社会サービスのための諸機関を利用するためにハマダーンを訪問しているのである。もちろん、いつの時代にも農民や周辺の小都市住民はハマダーンのバザールでの買物を最大の目的として、訪問してきたのであり、また、訪問してくるのである。

行政都市としての機能拡充と並んで、1970年代にはハマダーン市の開発を行政当局は検討し始めていた。ハマダーン市の5年後と25年後を検討した新マスタープラン(注2)によれば、1970年の都市面積531ヘクタールを5年後には957ヘクタールに拡大することが計画されている。とくに、現在の居住地域の南限近くにあるジャハン・ナマーズ通りを越えたところに、外環状道路が計画されており、この外環状道路に囲まれる地域を居住地域にしてしまう企画である。そして、ハマダーンの将来を文化観光都市としての発展に期待している(注3)。

1. 住居地域における変化

市内各地における建設時期を検討すれば、ハマダーン市の発展の形態的な特徴を知ることができる。まず、内環状道路の内側と外側とでは、内側の方が古い地域である。この内環状道路は1970年には西半分および東側の一部で完成していた。第1図からわかるように、ハマダーン市区分は、中央広場から放射線状に伸びる6本の大通りと内環状道路とによってなされている。内環状道路の内側は1～6区、外側が7、12区になっている。内側の1～6区は人口の密集地域であり、外側の7～12区の人口の希薄な地域である。

内側の1～5区では50年以上前(1920年代)にで

第1表 ハマダーン市の地区別人口と建築物住宅の年代

地 区	特 徴	人 口	人口密度 (人/アール)	住 宅 建 築 時 期 (%)			
				50年以上 前	50~35年 前	35~10年 前	10年以下
1	旧 行 政 区	4,064	161	31.6	31.9	10.2	26.1
2		5,722	214	32.3	22.1	14.8	30.8
3		11,938	382	27.1	19.1	36.8	17.0
4	アルメニア人多シ バザール地区	3,815	114	43.1	12.6	18.0	26.3
5		4,030	129	34.9	14.3	28.6	22.2
6	名望家居住地区 新 行 政 区	3,856	159	10.8	1.8	66.1	21.3
7		16,813	110	1.8	1.8	14.0	82.4
8		11,182	84	4.3	12.9	23.1	21.5
9		15,434	200	14.6	35.4	28.6	21.4
10		14,466	110	47.6	14.3	17.4	20.7
11		16,433	130	6.6	2.6	21.7	69.1
12		12,759	93	2.3	2.3	40.4	55.0

(出所) Iran, Ministry of Housing and Urban Development, *Tarkh-e jam-e shahr-e hamadan* [Master plan of Hamadan City], 1970.

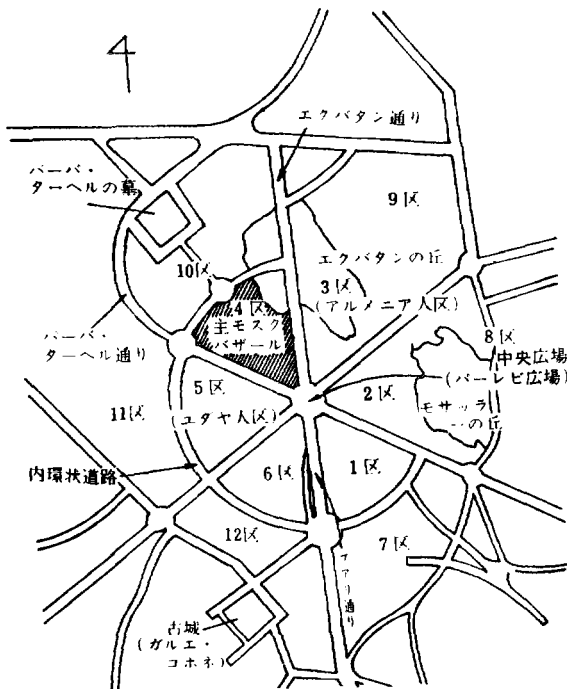
きた建物が平均で34.7%を占め、レザー・シャー期の建物が2~5区で平均17%を占めている。旧行政区の1区では36.7%とその比率は高くなっているし、逆に最近5年以内に作られた建物は13%

と少ない。1区の建物が相対的に古くなっているのに比較して、6区では35年以内、おもにレザー・シャー期以後に作られた建物が89.2%を占めている。この区には昔から名望家が多く居住しており、今日でも高収入者が多く住む。全く対照的なのはアルメニア人の3区で低所得者が多い。

外側区のうち、10区はバザール区の外側にあって、建物の47.3%は50年以上前のものであるし、14.3%はレザー・シャー期のもので比較的古いものが多い。アルメニア人区が多い3区の外側に位置する9区では、レザー・シャー期の建物が35.4%を占めており、外側の他区と大きな違いをみせている。つまり、この時期に3区が整ったことを示している。こうした9、10区に比較して、7区（新行政区で南の高台に位置する）は1960年以降に開発された。したがって、建物の24.6%は10~5年前のものであり、57.8%が5年以内に建設されたものである。大半がこのような近年建設されたものである。また、7区の両側の11、12区でも新建築物が多い。

ハマダーン市住民の居住期間をみると、「移動

第1図 ハマダーン市図



なし」の住民が全住民の89.6%を占め、移動した住民はわずか10.4%である。興味深い点としては、ユダヤ人の多い5区にはほとんど流入が認められず、流入があった場合も最近の例にかぎられる。これとは逆に、新行政区の7区では、60年代から恒常的に高率の流入が認められ、ハマダーン市では特例となっている。これからわかるように、今日、ハマダーン市は南の高台、水源に近い方向に発展している。25年後の都市計画を見ても、現在形成されつつある南部の突出部分を水路整備によって、徐々に両側に拡張させつつ発展をはかるようとしていることがわかる。なお、モータリゼーションによって、市の中心から遠い地域も徐々に居住地になってきている。

2. バザール区地における変化

(1) バザールから大通りへ

一般に近代化によるイスラム都市の変化は、旧商業区地（バザール、キャラバンサライ）に対して、これとは離れた地域に形成される近代的な、あるいは準近代的な商業区域が発展を開始するというパターンを取る。遠隔地交通を支える幹線道路が、市の周辺や時には市内中央部を通過する。こうなると旧商業区域の、小道の多い雑踏した地区は、とくに遠隔地交通の点で不便なために、卸売商はバザール内のキャラバンサライを出て大通りに移動する^(注4)。1900年のテヘランでも、卸売商の倉庫は、バザールをはずれた鉄道駅の近くに設置されていた。また、高級商人は高級顧客を求めてバザール地区を出て、大通りに店を構えるようになる。テヘランでいえば（旧）パーレビ通りの洋装店などがその例である。

こうして近代的商業区域が完成してくると、高級顧客は居住地から遠く離れたバザールまで買物の足を運ばなくなり、バザールとの関係は弱まっ

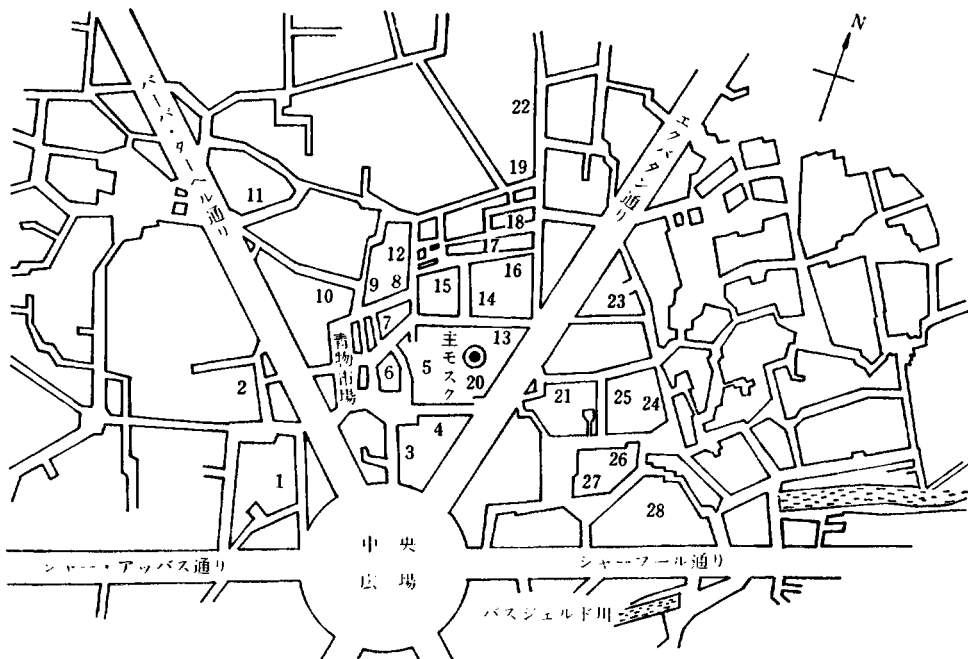
てゆく。バザール区域は中間層以下の都市住民や周辺農村からの訪問者だけを顧客とするようになる。このようにして顧客の分化が発生する。しかし、一般的には、人口規模10万ほどの都市においては、専ら高級な西欧商品を販売する地区は成立してこないし、歓楽街も欠けている^(注5)。

ハマダーン市においても、バザール商人が大通りに店を移す傾向は認められる。中央広場を経て南の高台に至るブアリ通りが、高級店通りとなっている。しかしながら、この大通りにも西欧風のショーウィンドーを備えた店はほとんどない。ハマダーン市には近代的商業区域も歓楽街も欠けている。準近代的商業区域が中心広場にやや認められるにすぎない。

準近代的商業区域で販売されているものは、テヘランに見られる近代的商業区域で販売されているものと同じではない。ベモン（Bemont）によれば、1970～71年の事情は次のとおりだった。香水、装飾具、菓子、ケーキなど高級輸入品には需要がほとんどなかった^(注6)。また、筆者が訪問した77年には輸入商品——カメラ、ラジオ・カセット、デジタル腕時計が出回り始めていたし、輸入された食用油やライセンス生産による石けんも販売されていた。中央広場に面した国営スーパーが、輸入品の主たる供給の場となっていた。しかし、テヘランで広く出回っていた高級チョコレートはなく、ここに近代的商業区域をもつテヘランとの差があった。

娯楽施設として市内には四つの映画館があり、二つは中央広場に面し、他の二つはブアリ通りにある。若者にとって映画は最も手軽な娯楽である。一般向の娯楽施設とは別に閉鎖的な教員クラブや役人クラブが数個設立されていた。教員クラブでは、休日に一般の映画館のフィルムより、西欧的

第2図 ハマダーンのバザール



なものを上映していたし、一つの社交場になっていた。ハマダーン市住民のための娯楽施設とは別に、ブアリ通りにあるブアリ・ホテル（国営、従業員52名）は、イランではイスファハンのシャー・アッバス・ホテルなどとともに、典雅な趣きをもった第一級のホテルであった。ここは外国人観光客とテヘランからくる豊かなイラン人の娯楽の場や宿泊地となっていた。ここには人口10万人規模のハマダーン市とは別の世界が形成されていた。

(2) バザールの配置とその変化

ハマダーン市のバザール地区は、30のバザール通りと25のキャラバンサライ（隊商宿、現在は倉庫として利用されている）からなっている^(注7)。バザールの主要な区域は、エクバタン通りとバーバ・ターヘル通りの二つの大通りにはさまれた区域にあり、その両側にもバザール区域は広がっている。1930年の都市改革で二つの大通りがバザール内に

敷かれ、既存の列状市場を切り隔てることになった。

(イ) 二つの大通り間の区域にあるバザール

イスラム都市では主モスク（マスジェド・ジョメ）に近いバザールには布屋が多い。ハマダーンも例外でない。主モスクの東側にマスジェド・ジョメバザール⁽⁴⁾がある。この先に小広場があり、今日ではここに青物、布など数軒の露店がでているが、かつては石炭が売られていた。この石炭を利用したと思われる小鍛冶屋（鋳作り）バザール⁽⁵⁾が、小広場の左に25軒ほど続いている。小広場の南には青物広場（サブゼ・メイダン）があり、野菜、肉、羊の足や頭そして内臓も売られている。ここは午前10時半ころから11時半までと夕方は4～6時までが、食料を買う人で雑踏する。青物広場の東側（図では右側）には乾燥果実売の大きな店が並ぶ。青物広場の西側（図では左側）には青物商が並ぶ。

錠作りバザール(5)と青物広場の中間には15店の肉屋が入る肉屋バザール(6)が位置する。この先にはガラス・鏡屋が多く、さらに先はガラス・バザール(9)となっている。ここには大工も多く集っている。ガラス・バザールからバーバ・ターヘル通りにむかってケブラ(メッカを示す方向)バザール(10)が伸びている。大工や小さな金細工商、古物屋が多い。ケブラ・バザールの西北に預言者バザール(11)があり、菓子パン屋などが多い。

主モスクの西北側には、トタン工やサモワール直しが並ぶ、トタン・バザール(12)があり、この通りの先にはアッタール(香料商人)や甘味物を売る甘味物バザール(7)がある。甘味物バザールの西北に銅細工バザール(8)があつて、これが先にのべたガラス・バザール(9)と接している。甘味物バザール(7)、銅細工バザール(8)と直交する形で乾燥果実バザール(13)がある。また、先のトタン・バザール(12)から西北に直交する形で、製本バザール(14)がある。製本バザールのと直交し、トタン・バザールと平行する形で紐バザール(15)と靴バザール(16)があり、さらに一本西北には靴・大バザール(17)がある。これらと平行して羊毛ロープ・バザール(18)とユダヤ人バザール(19)があり、ユダヤ人バザールが述前の預言者バザールに西端で連らなっている。

トタン・バザール(12)とエクバタン通りの接点から少し、エクバタン通りを進むと、ゴレシヤン・バザール(20)の入口がある。ここにはカーペット用糸屋が多く、帽子製造業者も数軒店を出している。この東側には皮のなめし場がある。この一角では老人が小さなスコップを胸にあてて、胸の力でこれ押し出すことで羊の肉と皮とを別々にしていた。ハマダーンの手工業として有名だった皮なめし業者は、エクバタン通りをこえてなめし業バザール(21)を作り、これに石灰バザール(24)が30～40軒

連っている。エクバタン大通りがなめし業バザール地区を二つに分離してしまったのである。

さてゴレシヤン・バザール(20)を先に進むと、ロバの鞍やマット作り、日本の上掛ぶとんに似たものを縫う店なども見られる。また、このバザール通りの両側にある両キャラバンサライでは染色業が営まれている。バザールもここまでくると徐々に農民向バザールという傾向が強くなってくる。農村からの買い出し客も多いし、彼らが休む茶屋もある。都市計画で作られたバーバ・ターヘル大通りと交わる地点には、この近代的な大通りと場違いな農民向の飼料屋がある。そして、この大通りをこえた所に古くは連っていた同じバザールが伸びており、その地域住民向の小バザールになっている。

(d) バーバ・ターヘル大通りの西南側のバザール

青物広場の西北の端からバーバ・ターヘル大通りに向って道がのび、大通りをこえたところにT字型のバザールがある。これが約50軒の金細工屋が並ぶ金細工バザール(2)である。金細工バザール(2)の南端から右側に小間物、布屋があり、左側には家具屋がある。金細工バザールの南側に宝石商バザール(1)が連らなっている。ただ、今日ではここには陶器屋の大きな店が並んでおり、中国製の安価な陶器が出回っているだけで、宝石商は見当らない。

(e) エクバタン大通りの東北側のバザール

エクバタン大通りをしばらく北に下ったところに、カーペット・バザール(22)の出口がある。今日では事務所と仕事場となっている旧キャラバンサライを囲む型でコの字型にカーペット商店が並ぶ。カーペット・バザールの南側の奥まった所に古着屋バザール(23)があり、ワラ売りバザール(28)が

これに接する。ここには住居用のドア・窓枠作りがいて、今日ではこれらの多くが鉄製に変わっている。以前は木製であったため彼らは一種の大工であった。また、家の屋根の下に敷く大型ムシロ（ハミール、ブリア）作りも、ここにわずかだが集まっている。古着バザールの手前にシャーヘザーデホセイニ・バザール⁽⁴⁾があり、さらに西北側に綿すきバザール⁽⁵⁾がある。綿すきバザールを右に進むと皮なめしバザールにいたり、その途中には羊の皮と脂肪だけを売る店も多い。

ハマダーンのバザールはこんな形態で成立している。そこにはイスラム都市のバザールとしての特徴が、いくつか認められる。すなわち、(イ)同業者が同一の地域や同一の通りに集中すること。とくに、銅細工、金細工、トタン細工や靴作り、砂糖菓子の手工業者の間では、この傾向が強い。商人の間でもカーペット商、肉屋、ガラス屋、乾燥果実売などの業種では集中が目立つ。(ロ)関連する業種が並存すること。たとえば、かつての石炭売り広場と小鍛冶屋バザールもこの例である。また、主モスクの北の入口には製本バザール⁽⁶⁾があって、コーランや宗教書の作成とモスクとの強い結び付きを現わしている。製本バザールと靴屋バザールは皮の利用で結びついている。同じように、糸バザールとカーペット商も大通りで分けられる以前はたがいに接して存在していたのである。

しかしながら、バザールにおける変化の一つとして、単業種の集中という特徴は崩れつつあることがあげられる。たとえば、古着バザールでは服屋18に対して他業種店26とウェイトは逆転しているし、糸バザール（ゴレシャン）にも他業種の店が多くなっている。これは、既存の単業種バザールに、他業者が店の営業権（サル・ゴフリ）を買って転入してきたものである。ガラス店はかつて6軒

だったものが、今日では住宅ブームによって約20軒にふえ、隣接の銅細工バザールにも侵入し始めている。そのなかには、銅工がガラス屋に自ら転業したものも混っている。糸バザールに隣接した靴屋バザールに、糸屋やロープ屋がふえているし、さらに、布屋も流入している。

このような、新たな需要に応じて、また、利益の多い業種を求めて、バザール内では業種変更が激しい。

バザールの変化としてもう一つ注目できるのは靴小売店が急にふえており、靴縫い屋（製造業）の比率が下がっていることである。これは、テヘランのメッリイ靴会社やウィーン靴会社という、大規模工場製の全国銘柄品が流入してきているためである。手工業者の商人化は、他市と比較すれば緩かながらも、ハマダーン市でも顕著になってきている。

バザールの変化として、バザールから大通りに店が移る傾向も見逃せない。

ハマダーンの商工会議所には、46業種6575人の商工業者が加っているとされている。下部組織として主要業種ごとに組合（アスナフ）があり、この組合は2年任期で組合長、副組合長、会計、書記を選出している。ここで品質・価格、組合員の休日等を決定する^(註8)。組合長は数人の有力者の中から選出されている。したがって組合長の店の所在を調べ、それがバザールの内にあるものと、大通りにあるものとの数を比較すればおよその傾向はつかめるはずである。現地商工会議所の持つ資料によれば、各組合長の店の所在は次のようになる。

① バザール内にある業種：宝石業、金細工業、銅細工業、羊内臓販売業、乾燥果実販売業、(5)。

② 市内大通りにある業種：(イ)エクマタン通り

——バザール地区を分割する形で作られた通り、したがって広い意味でバザール区域に入れられる。布屋、綿入れ衣服業、糸屋、靴屋、建築材販売業、石油販売業、(7)。(ロ)中央広場—菓子屋、ホテル業、小間物屋、大衆向レストラン、(4)。(ハ)ブアリ通り—高級店通り—。本屋、陶器商、衣服屋、染料販売、レストランおよび軽食堂(立喰屋)、電気屋、裁縫業、クリーニング屋、パン屋、玉子屋、(10)。(ニ)その他大通り—アッタール(香料商)、修理業、自動車部品修理業、写真屋、タクシー業、床屋、(6)。

以上のように、宝石業等の五業種を除いて、ほとんどの業種で有力商人はバザール区域を離れていることがわかる。

(3) バザール商工業者の職業移動

では、バザールを形成する商工業者の間で、職業移動や周辺農村からの流入はどうなっているのだろうか。筆者はハマダーン市で150名のバザール商人に、インタビューしたことがあるので、その結果を紹介したい。もっともこの調査は試行的なもので、サンプルの選出も厳密に行ったわけではないことを断っておきたい^(注9)。このために、ここでの結論は、いうまでもなく十分に論証されたものではない。むしろ、バザールにおける職業移動、流入について一つの仮説としてまとめてみたい。

150例のなかで有効回答例は141であった^(注10)。

(イ) 本人がハマダーン以外から同市バザールに流入した例。10名。

流入者の父の職業は8名が農業で、他の2名は靴縫いと石けん売りである。祖父の職業は7名が農業(9名判明中)であった。本人の流入以前の職業が農業であったものは、4名である。こうした流入者のその後の業種は、農業に関連するものが

多い。たとえば、10名中乾燥果実商2、果実商2、鞍作り1などと農業に近いものになっている。ほかに、靴屋、銅細工、金細工、肉屋、古着商が各1である。ただ、肉屋にしても町の中心にある肉屋バザールには店を持てず、糸バザールの先の方、つまり、地方からの農民向バザールが広がる区域にある。だから、流入者はバザール区域の中心に入り込みにくいといえよう。

流入してきた人びとの出身地は近隣(1~4キロメートル先)からが4名、近郊(20~40キロメートル先)からが2名、遠方(100キロメートル以内)からが3名となっており、他州からが1名。

(ロ) 本人はハマダーン生れで、父の代は農業を営んでいた例。12名。

このうち祖父の代まで職業が判明するのは6名で、この祖父はすべて農業を営んでいた。

本人の職業は古着商1、靴売り1、鞍作り1、麻布袋作り2(以上が農業関連業)。トタン工1、銅細工1(金細工はゼロ)、菓子屋1。布屋1、カーペット商1、ガラス商2(高級な業種)となっている。

(ハ) 本人はハマダーン生れで、祖父の代は農業を営んだ例。つまり、父の代でバザール商工業者に変った例。16名。これは祖父の代の職業が判明した78例の20.5%にあたっている。

(イ)~(ハ)をまとめると、141名中、本人、父、祖父のいずれかが農業を営んだ人は38名となり、27.0%となる。本人が以前農業に従事した人は6名(4.3%)、父の代で農業に従事した人は20名(14.2%)、祖父の代で農業に従事した人は29名(37.2%、78名中)となっている。

(ニ) 父と本人の職業が同一の例。49名(34.8%)。

二代職業が変わらない場合も比較的認められる。しかしながら、三代同一の職業を営む場合はわず

かとなり、布屋1、靴屋2、銅細工工1、鍛冶屋1の5名に限られている。

(ホ) 父と本人の間で職業が変わった例。44名(31.2%ただし(イ)～(イ)を除く)。

(ハ) 父と本人の間で職業が変わった例として農業からの転職を認めると82名となり、これは回答者の58.2%の高率である。祖父と父の間で職業が変わった例は37名で、回答者の50%を示す。世代間における職業移動の速さが認められる。

結局、イスラム都市のバザールでは世代間の職業移動率は高いといえよう。そればかりでなく、一つの店の所有者や経営者はたびたび変わる。祖父や父の店という観念に固執せず、店を買う権利金(サル・ゴフリ)さえ手に入れば、より利益のある店を求めて店を取り替えてゆくこともしばしばである。

(注1) 1953年に関しては、Geographical Division of the General Staff of the Army, *A Guide to Hamadan*, Tehran, n. d., pp. 1-19. 1973年に関しては、Iran, P. B. O. Statistical Center of Iran, *Jamiat va nira-e ansant-e sarshomali-ye kargaha-ye keshvar, hamadan* [Population and Labor Force Census for Workshop], 1975.

(注2) Morjan, Moshavar, *Tarkh-e jam-e shahr-e hamadan* [Master Plan of Hamadan City], Honar va memali, Nos. 15-16, 1973.

(注3) Iran, Ministry of Housing and Urban Development, *Tarkh-e jam-e shahr-e hamadan* [Master Plan of Hamadan], 1970.

(注4) Wirth, E., "Strukturwandlungen und Entwicklungstendenzen der orientalischen Städte," *Erdkunde*, No. 22, 1968, pp. 101-109; Wirth, E., "Zur Problem des bazars (suq, çarsi)," *Der Islam*, No. 51, 1974 and No. 52, 1975.

(注5) Kopp, H., *Städte im östlichen iranischen Kaspitiefeld, Ein Beiträge zur Kenntnis der jüngeren Entwicklung orientalischer Mittel-Klein-städte*, Erlangen, Fränkischen Geographischen Gesellschaft, 1973, p. 127.

(注6) Bemont, *op. cit.*, p. 197.

(注7) Mohammad Amin Behrami, *Hamadan dar gozasht-e nazdik* [Hamadan in Recent Times], Tehran, Moasse-e matabu ali sharghi, 1976. および筆者の作成した地図によっている。

(注8) 現地の商工会議所資料。

(注9) 1978年3月から7月まで4回にわたってハマダーン市を訪問し、簡単な調査を行なった。バザール地図作り、また質問票を用いてバザール商人の職業移動を中心にインタビューした結果である。この質問票の内容は以下のとおりである。

(1)年齢、生年月日 (2)既婚・未婚 (3)結婚した年(～年前) (4)子供の数、年齢 (5)仕事を手伝う子供はどの子か (6)父は存命か (7)兄弟・姉妹の数 (8)職業 (9)何年前から当該職業に就いたか (10)別の職業を持っているか (11)(もしあれば)何年前からか (12)現在の職業以前の職業は何か (13)それを何年間したか (14)父の職業は何か (15)祖父の職業は何か (16)職業が変わるとしたら何を希むか (17)兄弟の職業は何か (18)姉妹の夫の職業は何か (19)店の所有者は誰か(自分、他人) (20)店の入手の方法(購入、借入) (21)家賃の月額 (22)権利金の額 (23)店の使用年(～年前から) (24)現在の権利金の額 (25)商品の仕入れ先 (26)商店の仕入れ回数(月に何回か) (27)今月旅行をしたか(行先、目的) (28)店の客の特徴 (29)同業者組合のメンバーとなっているか。

(注10) これらバザール商人の職業移動の具体的な職名については、次を参照されたい。

Kanō, "City Development.....," pp. 318-322.

IV ハマダーン州の小都市マライエルと比較して

—— まとめにかえて ——

停滞型都市ハマダーンにおけるバザール商人の特徴を、ハマダーン州第二都市で近年急に発展してきているマライエルのバザール商人と比較することによって明らかにしてみたい。この検討を通じて二つの都市発展の差をもたらし要因の一端を理解しよう。

マライエル(旧ドウラトバード)は、カージャール

朝下での西部ペルシャ重視政策にともなう、1807年「村から町に」格上げされた。1880年代には人口4500人で、1900年には5000人であった。しかし1956年には2万1000人を数え、66年には2万8000人に増加している。とはいえ、この10年の人口増加率は全国平均なみである。ところが、1976年には4万7000人に達し、1966年からの10年で65.3%の増加率を示した。このように、マライエル市は、近年に至って急速に成長をとげた都市である。

こうした急成長をとげた都市のバザールでは、バザール商工業者の流入などにどのような変化が発生しているのだろうか。

周辺地域の農民や商人がマライエル市に流入し、バザール商工業者になることがまず第一の変化としてあげられる。これについてモメニ (Momeni) が行なった調査によると、666名中378名(57%)はマライエル生まれ、248名(37%)はマライエル地区の農村出身、残りの40名が近隣区や他州の出身である(注1)。また、バザール商工業者に限った調査では186名のうち、69名が農村出身者、つまり流入者であった。このうち9名は農村ではカーベットの仲介業を営んでいたという。これ以外の、60名は農業を営んでいたのである。モメニによれば、バザールのうちでも地価の安い、中低級バザールでは「バザールの農村化」が進行しているという。つまり、中低級バザールには農村出身者が多数流入しており、彼らの多くは製品加工業や雑貨商、さらには手工業に携わっている。これとはうらはらに、従来からマライエル在住の商人や卸売商人は転業したり、店舗を大通りに移動させるという現象がみられるのである。この現象があったからこそ、移動によって空屋となった店に、農村出身者が権利金を払って入り込む可能性が生まれたのである。こうして「バザールの農

村化」が進行する。

ここで述べたマライエルの状況はハマダーンと比較した場合、きわめて対照的である。周辺地域から流入してバザール商工業者となった事例をみると、マライエルは37.1%に対し、ハマダーンは6.7%にすぎない。

店舗を大通りに移動させることが第2の変化としてあげられる。しかし、これについてのマライエルの資料はない。これに代る一つの指標として、住民の出生した地区での居住期間の長さ、換言すれば、どの程度生まれた家、生まれた地区から市内のよその地区へ移動したかをみてみよう。マライエル出身バザール商工業者の85名は、旧市部の生家をはなれて、東部地域の新興住宅地に移っていた。出生した地区にとどまる比率はマライエルの場合15%に対して、ハマダーンでは89.6%となっている。ハマダーンでは市内での居住地移動はほとんどみられない(注2)。マライエルの移動はバザール商人のものであり、全住民の移動はもう少し低いのであろうが、二つの都市の対照的特徴はほとんど変わらないといえよう。

「バザールの農村化」が進行しているマライエ

第2表 ハマダーン市住民の継続居住期間地区別 (%)

地区	現居住地に住む年月				月7000リアル以上をえられる人口比率
	1～5年前	6～10年前	10年以上前	移動なし	
1	4.8	2.7	1.8	90.7	7.3
2	2.1	0.7	3.9	93.3	24.6
3	4.8	1.8	5.4	88.0	2.7
4	3.1	5.6	4.6	86.7	30.9
5	0.7	—	—	99.3	14.3
6	7.2	3.6	4.6	84.6	47.7
7	11.4	3.4	4.5	80.7	61.7
8	—	—	—	100.0	27.7
9	9.3	10.2	—	80.5	19.6
10	1.9	—	—	98.1	47.9
11	7.4	0.9	—	91.7	57.4
12	7.2	2.4	2.4	88.0	23.8

(出所) 第1表に同じ。

ルの場合は、都市の人口成長率が高いこと、しかも、都市の規模自体が小さなことの二点で、周辺農民の都市流入を容易にしている。成長的であるがゆえに流入しやすく、また、小規模であるがゆえに村との生活関連が強いし、流入して営業するための資金もわずかでよいといえる。だから、こうした小都市では農村からの流入者が、バザール内で営業を開始するのは比較的容易である。これに対して、ハマダーンほどの規模の都市になれば流入者がバザール内で営業できる可能性は減ってくる。この点は人口60万人の大都市、タブリーズのバザールで、筆者が行なった小調査にもはっきり出ている。地方農民が流入しやすいと思われるバザールの周辺において、筆者は86名にインタビューしたが、タブリーズ以外の土地で出生したものでバザール内に店をもった者はいなかった。また、この86名中、父の代は農業であった者は7名と少ない。これはハマダーンの場合の8%とほぼ等しい。結局、大都市バザールでは店を営業する権利金も高く、経営上のノウハウも複雑であり、しかも、既存商人が他の大都市への転出が限られるために、周辺農村からの流入者は少なくなるといえそうである(注3)。

第二次大戦後のハマダーンは、行政および文化の中心地としての重要性は認められながらも、産業都市としての発展は期待されなかった。したがって投資の対象にもならなかった。これが、その後のハマダーンの停滞をもたらした。もちろん、地場産業としてのカーペット業や皮革加工業では、相対的に規模の大きな工場も現われたとはいえ、これらはやはり近代的工業には転化できなかった。政府・民間をとわず、投資を仕向けさせるだけの魅力ある産業になれなかったためである。

19世紀末に再現されるハマダーン市の繁栄は、イギリス・インド商品のテヘラン流入を背景としている。つまり、ハマダーンは国際貿易の通商路に位置したことで繁栄したのであった。しかし、その後、1930年代にレザー・シャーが国内和平に成功し、中央幹線道路が開かれると、ハマダーンの繁栄を支えてきた西部イラン・ルートの重要性、つまり国際貿易の通商路としての重要性はまったく失われることになった。ハマダーン市は遠隔地交通路の拠点という機能を奪われ、往時の繁栄を支えるにたりるだけの目ぼしい産業を持ちえなかったことから、停滞に陥ることになった。

今日、中央自動車道沿線の拠点都市が発展と繁栄を享受している。とくに、1973年以降、イラン経済の規模が急激に拡大し、外国からの輸入を急増させた。そして、輸入品が荷あげされるペルシャ湾と大消費地テヘランを結ぶ、中央自動車道のもつ意味はいっそう大きくなった。中央自動車道沿いの都市は、物流の増大にともないテヘランとの社会的な結びつきがきわめて強くなったことで発展と繁栄を享受することができた。ホッラマバード、アラーク、コムなどがその例である。

いままでハマダーンとの比較の対象として述べてきたマライエルは、アラークとともに発生的にみてもテヘランの政府と結びつきが強い都市であった。というのは、オスマン・トルコ帝国に対しても、また、ロル族やパフティアリ族に対しても、テヘラン政府の前線基地の役割を担っていたのである。当時より、テヘランとマライエルとは容易に交通しうる地理的条件をもっていたのである。その後、中央自動車道が完成すると、両都市の結びつきはより強くなっていた。そして、1970年代に入って中央自動車道のもつ意味が大きくなるにつれて、マライエルはテヘランとの社会的結びつ

きをきわめて強め、西部イランの中堅都市として、この10年で急に発展することになった。

これに対してハマダーンの発展は、さまざまな要因が加わって、緩やかなものであったし、おそらく今後もゆっくりと発展するにとどまるだろう。しかしながら、そうした緩慢な都市発展の内部でも、人びとの社会意識や欲望の変化に裏付けられながら、変化は着実に進んできているのも事実である。商工業者の職業移動やパザール構成の変化が、それをはっきりと示しているのである。

(注1) Momeni, *op. cit.*, pp. 78, 148.

(注2) Ministry of Housing, *op. cit.* また、1976年のセンサスでも71~77年のハマダーン州に関する社会移動がわかる。

ハマダーン州の社会移動は全国に比較して少ない。表にみられるように、ハマダーン州の都市部では、調査時と同一シャーレスタン(郡)生まれは91.1%(28万7000人)であり、全国レベルの72.8%とは大きな差を示している。また、他州からハマダーン州への流入

は3.6%(3万9000人)であり、全国レベルでは17.4%である。ここでもハマダーン州が著しく停滞的であることがわかる。

ハマダーン州および全国における社会移動(1976年)

(単位: 1,000人)

	合 計	調査時と同一郡生まれ	同州他郡生まれ	他州生まれ	外国生まれ
ハマダーン州	1,093 (100.0)	1,041 (95.2)	11 (1.0)	39 (3.6)	1 (0.1)
都市部	315 (100.0)	287 (91.1)	6 (1.9)	21 (6.7)	1 (0.3)
農村部	778 (100.0)	755 (97.0)	5 (0.6)	18 (2.3)	0 (0)
全 国	33,662 (100.0)	28,432 (84.5)	1,784 (5.3)	3,261 (9.7)	185 (0.5)
都市部	15,797 (100.0)	11,506 (72.8)	1,392 (8.8)	2,741 (17.4)	158 (1)
農村部	17,865 (100.0)	16,925 (94.7)	393 (2.2)	520 (2.9)	27 (0.2)

(出所) Plan and Budget Organization, Statistical Center of Iran, *National Census of Population and Housing*, Hamadan Gstan, pp. 2-4. Total Country, pp. 4-6.

(注) 「郡」とはシャーレスタンの訳。カッコ内はパーセント。

(注3) タブリーズにおける調査は1978年8月に実施した。

(アジア経済研究所調査研究部)